

# 試論・モンテーニュの友愛について\*

家 永 道 生

Essai sur l'amitié de Montaigne

par

Michio IENAGA

Pour l'éclaircissement de l'intime du cœur de Montaigne qui ne prenait pas encore la plume des *Essais*, j'ai envie d'éclaircir son amitié avec de La Boétie.

D'après les écrits de Montaigne, leur amitié, où deux âmes se fondaient, atteignait l'essentielle; ils ne s'aimaient que "par ce que c'estoit luy; par ce que c'estoit moy." Mais l'amitié (1559-1563) finit en la mort subite de La Boétie.

Il me semble qu'à la première période des *Essais* la perte du meilleur ami ferait Montaigne considérer sa solitude et le préparerait au dernier moment de lui-même.

前の論文\*<sup>1</sup> に記したように、当論文以後数回にわたって、エッセイにおける自己描写の問題を究明する予定である。\*<sup>2</sup>

ところで、エッセイにおける「自己描写」は、現在のモンテーニュ研究では一般に、エッセイ執筆の最初期(1572・3年頃)から数年後(1578・80年頃)に現われ始めると見做されている。即ち、初期の諸章は非個人的であるのに、自分のことが語られるようになる諸章は、個人的であるとされている。\*<sup>3</sup>

---

\* 水産大学校研究業績 第672号, 1972年7月11日 受理.

Article reçu le 11 juillet 1972 et numéroté 672 par l'Université des Pêches de Shimonoseki.

\* 1. 水産大学校研究報告, 第20巻第3号(1972年3月発行) 所載, 「モンテーニュのエッセイにおける自己描写について」。

\* 2. 当論文の依拠した原書及び使用略号については, \* 1 に記した前論文末尾の註1~5を参照されたい。

なお, 当論文で新たに使用する略記の仕方は, この論文末の註に記した。

\* 3. このパラグラフで述べたような考え方は, P. Villey の研究成果に基づくものと思われるが, Villey は次のように記している。

《(1572-73 environ) Il [Montaigne] commence à écrire son ouvrage [Essais]. Les chapitres composés pendant cette période se distinguent par leur caractère d'impersonnalité.》(Vil., p. XXXIV) 《(1579-début 1580) Composition des essais Ixxvi; Ixvii; Ixx, une partie au moins de Ixxvii; Ixxxvii. Ces essais, qui sont parmi ceux où Montaigne 《peint son moi》, s'opposent par leur caractère personnel à ceux de 1572.》(Vil., p. XXXV).

しかし、隠棲初期に記された諸章のうちでも、特に意味深い・内面的な諸章は、モンテーニュのそれなりの内的要求をもって書かれたのではないであろうか。そして、そうした諸章は、非個性的外面を持っているにもかかわらず、そこでモンテーニュによって内面的に獲得されたものを通じて、彼を一層個性的たらしめる働きを持っていたのではないであろうか。

このような観点から、先ず、当試論では、エセエ執筆以前におけるモンテーニュの内面にとって、最も衝撃的事件であった、彼のブワティとの友愛を考察してみたいと思う。即ち、ラ・ブワティは、およそどのような人物であったか、二人の友愛はどのようなものであったか。この愛はモンテーニュの内面にどのような影を落したか、これら三つのことを以下に考察してみたい。

## 1. ラ・ブワティ

エティエンヌ・ドゥ・ラ・ブワティ Étienne de La Boétie\*1 は、1530年11月1日、フランスのペリゴール地方、ドルドーニュ県の東南端近くの小都会サルラ Sarlat に生まれた。父はこの地方の高級官吏であったが、エティエンヌが10歳を過ぎた頃死亡し、母もおそらくこの頃亡くなって、彼は孤児となった。その後、高位の聖職にある叔父によって彼は育てられた。この叔父は、稀にみる優しさで、ブワティの教育が進むのを監督し、また彼に、芸文と知的正確さの好みを与えた。ブワティが、古典学の諸コースのすべてと哲学とを完全に終えると、叔父は、ブワティが法学の方に向うよう命じた。ブワティは、オルレアン大学 Université d'Orléans\*2 に行き、この大学で法学の学士号を受けた(1553年9月23日)。彼は、この時23歳で若くはあったが、高い能力をもっていたので、ボルドー高等法院 Parlement de Bordeaux に参議 conseiller として受入れられた(1554年5月17日)\*3。おそらく、こののち暫くして、ブワティは、マルグリット・ドゥ・カルル Marguerite de Carle と結婚した。

マルグリットは、ボルドー高等法院の上級の職にあるピエール Pierre や、文学史上に名高いプレイヤッド運動に関係していたランスロ Lancelot\*4 を兄弟にもっていた。彼女は1552年以来未亡人で、二子の母であった。彼女は、おそらくブワティよりも年上であった\*5。しかしブワティは、彼女の傍らで家庭的な幸福を味わうことができたと共に、学究的な平穏な生活をも楽しむことができた。

\* 1. この名前のブワティの部分は色々に読まれている。日本では一般に“ボエシイ”と発音されており、関根秀雄氏の著作の或るもの(文献4)に、一時ブワティが用いられていた。

しかし、*Poètes du XVI<sup>e</sup> Siècle* (texte établi et présenté par Albert-Marie Schmidt, Pléiade, 1953) (この中に、ブワティの詩の若干も集録されている)によれば、《Etienne de La Boétie (prononcer: La Boitie, avec le t dur, comme dans ortie)...》(p.663)と記されているところから、当論文では、“ブワティ”を用いた。

同様に、綴りも種々のものがあって、*Essais* (Bor.) では、Estienne de La Boitie (I, p. 203 etc.), Estienne de La Boetie (II, p. 54 etc.) (いずれも筆者下線)等とあり、P. Villey は、主として、Étienne de La Boétie を用い (cf. Vil.), P. Barrière は Etienne de La Boëtie を用いている (cf. 文献1)。 (いずれも筆者下線)。筆者の見た範囲内では、この四種、即ち、Boitie, Boetie, Boëtie, Boëtie の四種であるが、当試論では、一応、*Poètes du XVI<sup>e</sup> siècle* にしたがって、Étienne de la Boëtie を綴字として用いた。

\* 2. M. Rat は、この大学を、《当時のフランスで第一等のもの》と記している。(cf. Ra., Ip. 365)

\* 3. ブワティがボルドー高等法院に受入れられた1554年5月から3年余経って、1557年12月に、モンテーニュもこの法院に入ってくる。

\* 4. Lancelot Carle (1500頃-?): ギリシャ学のよき理解者であり、また、*Poètes du XVI<sup>e</sup> siècle* の著者が伝えるところによると、「ジョワシャン・デュ・ベレーによれば、羅・伊・仏語でひとしく書くことのできた人」とも云われる。彼自身詩作もし、プレイヤッド運動の守護者でもあった。(cf. 文献3, p. 297)

\* 5. マルグリットの娘、つまりブワティの義理の娘は、彼より15歳しか若くなかった。このことから、マルグリットの方がブワティより年上だったろうと推測されている。(cf. 文献2, p. 70)

ブワティは、法院内で目立つ存在であった。模範的に孜孜として仕事に勉め、仕事のすべてにおいて、先輩達の尊敬を得るほどしっかりしており、公明正大であった。彼は、国王シャルル九世への使いともなり、1561年アジャンに新教徒の一揆が起って、王の代官ビュリ Burie がここに鎮定に向った時は、選ばれて、ボルドー高等法院参議のうちでただ一人これにしたがったりもした。また、ボルドー市に迫る新教徒の脅威に備えて、1562年12月、この法院が一種の市民軍を編成した時には、おのおの100名の部下を組織する為の12名の参議\*1の中に選ばれた。

また彼は、有能なユマニストであった。ギュイエンヌ学校で演じられるラテン劇の評者をつとめ、フランス語の、特にラテン語の有能な詩人であった。また、プルタルコスやクセノフォンの著作の或るものを、翻譯したり註釈したりした\*2。

また、当時ロンサール Pierre de Ronsard (1524-85) にひきいられたプレイヤッド(七星詩派)の7人のうちの、常に変らぬ1人に数えられたジャン・アントワーヌ・ドゥ・バイフ Jean-Antoine de Baïf (1532-1589) とは、ブワティは絶えず関係を持っていたし、1563年以降は、このプレイヤッドの1員に数えられるジャン・ディヌマンディ・ドラ Jean Dinemandi Dorat (1508-88)\*3 の親しいサークルの中へと、彼は迎えられもした。しかし、ブワティが心からなる最上の好意を与えたのは、モンテーニュに対してであった。

ところがブワティは、或る時、ちょっとした気晴らしに出かけたあと、ひどい腹痛にみまわれて、大層疲れたように感じる(1563年8月8日)。おそらく彼はこの時、一種のペストか、或いは赤痢に罹っていたのであろう。家族や、特にモンテーニュに看取られながら、彼は苦痛のうちにあってなお、超人的な平静さでそれに耐えつつ死んで行く。1563年8月18日、33歳に満たない時であった。

以上からみると、エティエンヌ・ドゥ・ラ・ブワティは、単に職場社会で有能勤勉な人物であるのみならず、当時文化的に高い水準にあったボルドー高等法院の人々のうちでも、古典への、とりわけ広い教養を持ったユマニストであり、更に、新進の文人仲間でも注目された存在であった。そして、公明・気丈な人柄は、古人に比すべきものを持っていた。

\* 1. ボルドー高等法院内の法官の数について：この当時——正確に何年かは判然としないが——は、Villey が引用するスカリジェ Scaliger \*の文章によれば、法官とみられるものが、およそ60人居た。(尤も、ここでスカリジェが云おうとしたのは、この60人のうちに、20人の、有能かつ博学な人々 *habiles et doctes hommes* が居るということであったが。) (cf. 文献5, p. 21)

\* Julius Caesar Scaliger (1484-1558) : 彼は当時のヨーロッパで、学者・文人として、最高の評価を受けていた。イタリアに生まれ、1525年以後、フランスのアジャンで活躍した。(Britannica, 1963)

\* 2. 現在の筆者に知られ得る、ブワティの作品名は次の通りである。

詩 : *Vers français. Six Sonnets. Vingt Neuf Sonnets.* 以上三つの詩は“文献3”に集録されている。

このほか、1571年にモンテーニュが出版したラ・ブワティ著作集の題名には、ラテン詩 *Vers latins* が含まれている旨記されている。

論説 : *Discours de la servitude volontaire. Mémoires de nos troubles sur l'édit de janvier 1562.*

註釈 : Frame は、《*La Boétie* annotated his [Plutarch's] treatise "On Love".》と記している。(cf. 文献2, p. 71)

翻譯 : *La Mesnagerie de Xenophon. Les Règles de mariage de Plutarque. Lettre de consolation de Plutarque à sa femme.* これら三つは、モンテーニュの記すところでは、ギリシャ語から仏訳されたものである。(cf. Ra., I p. 369)

なお、ブワティの著作については、将来、*Œuvres complètes d'Estienne de La Boétie* (par P. Bonnefon, Bordeaux, Gounouilhou, 1894) に接することができれば、一層明らかとなるであろう。

\* 3. Jean Dinemandi Dorat : プレイヤッドが形成される時、ドゥ・バイフやロンサール等の師として重要な役割を果たしたギリシャ学の大家。彼自身も詩作した。

この人について、モンテーニュは次のように述べている。《魂の生まれつきの性質について私は云うのだが、生きている人で私の知った最も偉大な人、最もよく生まれついた人は、エティエンヌ・ドゥ・ラ・ブワティであった。それは本当に、全き魂であったし、この魂は、どこから見ても美しい相貌を示していた。それは、古人の風格を持った魂であった。彼の運命がもしそれを望んだならば、学識と研究によって、豊かな天性に、多くのものを加えて、この魂は偉大な働きをしたことであろう。Et le plus grand pue j'aye conneu au vif [=vivant], je di des parties [=qualités] naturelles de l'ame, et le mieux né, c'estoit Estienne de La Boitie : c'estoit vraiment un'ame pleine et qui monroit un beau visage à tout sens ; un'ame à la vieille marque et qui eut produit de grands effects [=actions], si sa fortune l'eust voulu, ayant beaucoup adjousté à ce riche naturel par science et estude.》\*1 と。

## 2. 友 愛

ところで、ミシェル・ドゥ・モンテーニュ Michel de Montaigne の方は、ブワティの誕生におくれること3年、1533年2月28日に、貴族モンターニュ\*2の城館\*3で生まれた。父ピエール・エイケム・ドゥ・モンテーニュ Pierre Eyquem de Montaigne (1495. 9. 29 - 1568. 6. 18) の第三子として生まれたが、はじめの二人は生後間もなく逝ったから、ミシェルは長男として生長した。父は、新興商人から出た成上りの家系の、中級の貴族であるとはいえ、意欲的な、文化の理解者であり、この息子を、当時の最もよい教育法にしたがい、ラテン語の直接教育法を用いて育てた。教育の仕方は一般に、優しさに満ち、至れり尽せりのものであった。ミシェルが幼少年時代に接した文化の大部分は、古代ギリシャ・ローマのものであった。このような素養が、彼をブワティに結びつける素地になったと想像することは無理ではないであろう。

ミシェルは、ギユイエンヌ学校に居た間 (1539-46) も、父の心遣いによって、主体性を重んじる暖かい処遇を与えられた。(この学校を出てからしばらくは、彼がどうしていたのか不明である。或る期間、ボルドーの大学もしくはトゥールーズの大学で、法学を学んだのではないかと推測されている。)\*4 やがて1554年、ペリグーの御用金裁判所 Cour des Aides\*5 に席をもつ父ピエールが、ボルドー市長に転出したので、そのあとの席を、彼からミシェルは譲られる。しかしこの裁判所は、1557年に廃止され、ボルドー高等法院に合併されたので、モンテーニュもここに移る。1554年以来、この高等法院にブワティが居ることは既に述べた。

二人の交友は、モンテーニュが、ボルドー高等法院に入った直後から生ずる方が順当のように思われるが、モンテーニュが述べるところによれば\*6 そうではない。モンテーニュはブワティの名を、《自発的隷従論 Discours de la servitude volontaire (一名、反一人論 Le Contre Un)》の著者たる同僚として知ってはいたが、二人が近づきになったのは、或る祭の日であった。《偶然に、街の大きな集りの中で初めて逢った時、我々は互いに、余りに魅せられ、知り合い、結ばれ合ったので、以来我々にとって、お互いほどに近

\* 1. (II - 17, p. 659)

\* 2. “Montaigne” は、この当時、山 (montagne) と同様、モンターニュと発音されていた。(cf. 文献 2, p. 63)

\* 3. この貴族邸は、ブワティが生まれた都市サルラもそこに含まれるドルドーニュ県にある。サルラはこの県の東南端、モンターニュ領は西南端に位置する。

\* 4. cf. 文献 1, p. 30 ; 文献 2, p. 42-45 ; 文献 6, p. 21.

\* 5. Cour des Aides は、御用金 les aides, 租税 les impôts, 塩税 les gabelles 等に関する民事上・刑事上の訴訟を扱った裁判所。

\* 6. モンテーニュがエセエの中で、「この人物との甘美な交際を楽しむことが私に与えられていた4年間」と、はっきり記している (I - 28, p. 193) ところから、Villey はここに註を施して、彼らの出逢いの時は1559年だとし得るとしている (ibid.)。

しいものは何もなくなった。…à nostre premiere rencontre, qui fut par hazard en une grande feste et compagnie de ville, nous nous trouvasmes si prins, si cognus, si obligez [=liés] entre nous, que rien des lors ne nous fut si proche que l'un à l'autre.》\*1 とモンテーニュは記している。

そして、この交わりは、遅すぎた・束の間の交友の埋合わせをするかのように、そして、見做う他の友愛はないかのように、一般の友情の、なまぬるい予備的段階をとびこえて、彼らの友愛それ自身に進んで行った。《我々の友愛は、期間もひどく短かったし、それに、とても遅く始まったので、(というのは、二人とも成人していたし、彼の方は少し年上だったので)\*2、無駄にする時間は少しもなかったし、生気のない・通常の友情などを手本にはいられなかった。あれらの友情では、多くの・長い警戒と予備的なつきあいが必要である。ところが我々の友愛は、それ自身以外にはどのようなアイデアも持たなかったし、我々の友愛それ自身を頼りにするしかなかった。Ayant si peu à durer, et ayant si tard commencé, car nous estions tous deux hommes faicts, et luy plus de quelque année, elle [=notre amitié] n'avoit point à perdre temps, et à se regler au prtron des amitez molles et regulieres, ausquelles il faut tant de precautions de longue et preallable conversation [=commerce]. Cette cy n'a point d'autre idée [=modèle idéal] que d'elle mesme, et ne se peut rapporter qu'à soy.》\*3 と。

このようにして、彼ら自身の友愛へと進んで行った二人は、兄弟のように慈しみ合った。事実お互いは、兄弟 frêre と呼び合っていた。\*4 《まことに兄弟という名は、美しい・慈愛に満ちた名前である。だから、我々、彼と私は、この名で我々の縁を結んだのだ。C'est, à la vérité,\*5 un beau nom et plein de dilection que le nom de frere, et à cette cause en fismes nous, luy et moy, nostre alliance.》\*6 と。しかし、この兄弟の関係は、選択が伴わないで、自然的にきまった兄弟のそれではなかった。互いの財産を争うこともなく、勢力争いもなかった。仮りに争いがあったとしても、それは、互いが互いの心を磨き合う切瑳琢磨でしかなかった。二人の愛は、男女のそのように、不安定で、刺すような、移り気な、しかも互いの一部でしか結ばれないような愛ではなかった。落ち着いた熱に、絶えず彩られ、精神的で、全体的な愛であった。\*7

このような愛の中で、二人は、人と人とが結ばれ合う、最高の在り方に迄達する。《要するに、我々が一般に、友人と呼び、友情と呼んでいるものは、何らかの機会か便益によって結ばれた親交にすぎず、我々の魂もこうした点で共にあるに過ぎない。しかし私の云う友情においては、我々の魂は、互いにまじりまじり合っており、そのまじり方は余りに全体的なもので、それらを結びつけた縫目も、消失してもはや見出すことはできない。An demeurant, ce que nous appellons ordinairement amis et amitez, ce ne sont qu'accoinctances et familiaritez nouées par quelque occasion ou commodité, par le moyen de laquelle nos ames s'entretiennent [=se tiennent ensemble]. En l'amitié dequoy je parle, elles se meslent et confondent l'une en l'autre, d'un melange si universel, qu'elles effacent et ne retrouvent plus la couture qui les a jointes.》\*8 と。

魂と魂との、この、融合とでも云うべき在り方は、我々の理由づけを拒むものを、その底に持っているであろう。モンテーニュは次のように云う。《そこには、私のあらゆる推理の彼方に、それについて個別に云

\* 1. I - 28, p. 188.

\* 2. 1559年に二人が出逢ったとすれば、この年に、モンテーニュは26才に、ブワティは29才になる。

\* 3. I - 28, p. 188 - 9.

\* 4. cf. Ra. I, p. 378.

\* 5. この à la vérité には、譲歩的意味はない。(cf. Lex.)

\* 6. I - 28, p. 185.

\* 7. 兄弟の関係や異性との恋愛を、ブワティとの友愛に比較して、モンテーニュ自身がこのように述べている。(cf. I-28)

\* 8. I - 28, p. 188.

い得るものの彼方に、この結合の仲介となった何か或る説明しがたい宿命的な力がある。Il y a, au delà de tout mon discours, et de ce que j'en puis dire particulièrement, ne sçay quelle force inexplicable et fatale [=qui vient du destin], mediatrice de cette union.》\*1 したがって、《もし人が、どうして彼を愛したのかを私に云わせようとしても、私は、「それは彼であったから、それは私であったから」と答える以外あらわしようがないと思う。Si on me presse de dire pourquoy je l' [=La Boétie] aymois, je sens que cela ne se peut exprimer, qu'en respondant : Par ce que c'estoit luy; par ce que c'estoit moy.》\*2 と。

しかしながら、この四年間の友愛は、既に述べたように、伝染病にかかったプワティの死によって、瞬間に断ち切られてしまう。この時モンテーニュは、死にゆこうとするプワティの傍らに、彼が息をひきとる迄居つづける。その折の様子は、モンテーニュがその父に書き送った手紙\*3の中に感動的に描かれているが、そこには、上に辿ってきた二人の友愛に齟齬するものは何もない。彼等二人が抱き合った友愛は、真実のものだったと云うことができるであろう。

### 3. 友 愛 の 影

それにしても、このような友愛の相手を失ったモンテーニュには、友愛の以前には感じなかった淋しみが襲うのではないであろうか。領有していた一つの世界の、半ばしか自分には残っていないと感じられるのではないであろうか。彼は次のように記している。《私の残りの生涯を、いや取えて云うが全生涯を、あの人物との甘美な交友を楽しむことができた4年間にくらべるならば、これは煙にすぎず、ほの暗く退屈な夜にすぎない。…私の前にあらわれる楽しみすら、私を慰めるどころか、彼を失った悲しみを倍加させる。我々はすべてを共有していたから、私は彼の分け前を盗んでいるような気がする。…私は、どこに居ても、第二の彼に成りきり、それに慣れていたので、もはや半分でしかないような気がする。…si je la [=le reste de ma vie] compare, dis-je, toute aux quatre années qu'il m'a esté donné de jouyr de la douce compagnie et société de ce personnage [=La Boétie], ce n'est que fumée, ce n'est qu'une nuit obscure et ennuyeuse...et les plaisirs mesmes qui s'offrent à moy, au lieu de me consoler, me redoublent le regret de sa perte. Nous estions à moitié de tout [=partagions tout]; il me semble que je luy desrobe sa part... J'estois desjà si fait et accoustumé à estre deuxiesme par tout, qu'il me semble n'estre plus qu'à demy.》\*4 と。

しかし、本来、人は孤独であるとするならば、このような、完全な孤独の喪失は、却って彼に、孤独への回帰を求めさせるのではないであろうか。また、このように融け合った魂の一方の急逝は、残されたモンテーニュに、自らの死への心構えをさせずにはおかないのではないであろうか。これら二つの問題が、エセエ執筆の初期において、モンテーニュの内面と最も深い関係にある諸章の、主題として登場するように思われる。

\* 1. I-28, p.188.

\* 2. ibid.

\* 3. Ra., I p. 371-385.

\* 4. I-28, p. 193.

註

用いた *Essais* の原書等の略号は、当試論 p.185 の“\*2”に記した通りである。当試論で新たに付加した略記の仕方は下記の様である。

略記

書名

- 文献1…Barrière (P.), *Montaigne, gentilhomme français*, Bordeaux, Delmas, 1948.  
 文献2…Frame (D.M.), *Montaigne, a biography*, London, Hamilton, 1965.  
 文献3…*Poètes du XVI<sup>e</sup> siècle*, texte établi et présenté par Albert-Marie Schmidt, Pléiade, 1953.  
 文献4…関根秀雄, 「モンテーニュ伝」, 白水社, (1939初版) 1949.  
 文献5…Villey (P.), *Les Essais de Montaigne*, Paris, Sfelt, 1946.  
 文献6…Thibaudet (A.), *Montaigne*, Gallimard, 1963.